

〔教育実践研究〕

本学における助産実習での学びの内容

服部 律子 堀内 寛子 谷口 通英
 布原 佳奈 名和 文香 宮本 麻記子

Learning from Experience of Delivery Term Practice in Nurse-Midwifery Education

Ritsuko Hattori, Hiroko Horiuchi, Michie Taniguchi,
 Kana Nunohara, Humika Nawa, and Makiko Miyamoto

I. はじめに

本学では、平成12年の開学以来、学士課程において助産師養成を行ってきている。学士課程での助産師教育は、従来から指定規則に従って上乘せ教育のための過密カリキュラムが問題になっている。特に助産実習については、1971年のカリキュラム改正から指定規則にある実習時間数の変化はなく、学士課程で助産師教育を行っている大学の多くは、助産実習を、看護教育カリキュラムの卒業必要単位に、さらに選択という形で短期間のうちに集中的に展開している。そのため学生は、知識・技術が定着せず、心身ともに負担を強いられている問題が指摘されている¹⁾。

また助産を選択した学生が助産師として就職する割合も約3/4という報告もあり、助産師として働きたいという動機や、アイデンティティ形成などの課題もある^{2, 3)}。また学士課程では収まりきれない教育内容を、大学卒業後、1年間の専攻科や大学院で履修させる大学もでてきて、教育現場は混乱している状況である。

本学では、教育内容の精選と教育方法の工夫を図り、看護学教育のより本質的な内容を効率的に教授する努力を重ね、教育課程のスリム化を図っている。助産師教育においても、不可欠な助産実習を選択領域での本学科の教育課程では、「卒業研究」として、他の学生が看護過程の展開実習に相当するものとして扱っている。この実習を通して、4年次のほぼ1年間をかけた助産実習と実習から導かれた問題意識に基づく研究方法の習得が可能

となっている。

本学では、平成15年より毎年6名ずつ助産師を養成し、全員が助産師として就職し助産の現場で仕事をしている。本学の助産教育の展開と課題については、2期生までの教育の現状と特に分娩介助技術の修得状況について報告している^{4, 5)}。分娩介助技術に関しては、8例以上でほぼ技術の修得ができていたことを報告した。

今回は学生の助産実習での学びと課題を検討することにより、卒業研究として位置づけている助産実習において、卒業時に目標とされている助産師としての基礎的能力がどの程度養成されているかを考察したい。

II. 対象と方法

1. 研究対象

本研究の対象は、助産実習終了後に学生が提出する「助産実習での学び」と「今後の課題」の記録である。分析対象は平成16年～18年度に卒業研究として助産実習を履修した18名の記録内容である。

2. 分析方法

学生の記録から、助産実習での「学び」と「課題」について、記述内容を繰り返し読み、意味のある文脈を取り出した。それらを内容の類似するものをまとめてサブカテゴリーをし、さらにカテゴリーへと抽象化した。また課題についても同様に、内容をカテゴリー化した。分析内容は助産実習担当の教員間で検討した。

3. 倫理的配慮

研究に実習記録を用いることについては、研究の目的や、記録の内容が成績に影響しないこと、個人名では集計はせず、プライバシーは保護されることを予め学生に説明し、口頭と文書で了解を得た。

Ⅲ. 結果

1. 学生の学びの内容

学生の学びの記録は、A4 用紙 1 枚の自由記載であり、個々の学生により記載量は異なるが、ほぼ用紙 1 枚にわたって、4 月から 10 月までの助産実習を終えて各自が学んだことが記載されている。学生の学びを分析した結果、学びの内容は 7 つのカテゴリーに分類された(表 1)。記述数の多いものから順に説明する。なお【 】はカテゴリー、「 」はサブカテゴリーを表す。

1) 【産婦を尊重しその人にとってのよいお産への援助】

このカテゴリーには、「産婦の気持ちを支える」「産婦の強みを引き出すケア」「産婦の個性を知る」「家族を巻き込むケア」「産婦に寄り添う」「産婦が主体のお産」

の 6 つのサブカテゴリーが含まれた。

「産婦の気持ちを支える」では、お産という出来事の裏には、その人や家族が今までいろいろ抱えてきた思いがあり、その思いを支えながらより安全で安楽なお産を援助することや、産婦がどんな思いで分娩台の上でがんばっているかを知ることの重要性を学んでいた。「産婦の強みを引き出すケア」では、産婦のどの部分を補えば、産む力を最大限に引き出すことができるか、産婦と家族の力を合わせ、強みを引き出すように働きかけることの大切さを学んでいた。「産婦の個性を知る」では、産婦自身をしっかりとみること、対象がどんな人なのか性格を考えてケアをしていくことを学んでいた。また産婦の痛みの感じ方や、過去の分娩体験の受容など、産婦それぞれの考え方や感じ方を理解して関わることの大切さやその産婦にとってのよいお産とは何かを考えることも学んでいた。「家族を巻き込むケア」では、産婦と家族とともに分娩に取り組むとはどういうことなのか、家族や夫婦を巻き込んだお産の大切さ、夫婦で乗り切るお産や上の子との関わりへの援助、さらに家族で分娩に取り組める

表 1 分娩期実習における学生の学び

() は記述数

カテゴリー	サブカテゴリー
産婦を尊重しその人にとってのよいお産への援助	産婦の気持ちを支える (9) 産婦の強みを引き出すケア (8) 産婦の個性を知る (7) 家族を巻き込むケア (7) 産婦に寄り添う (6) 産婦が主体のお産 (5)
分娩経過のアセスメント能力の修得	分娩経過の予測の意味 (12) 様々な情報やリスク因子の総合的なアセスメント (10) 即座に判断すること (6) 異常時の対応 (3)
分娩介助技術の修得	技術の体得 (7) 技術の意味 (6) 介助技術の多様な方法 (3)
分娩第 1 期のケアの方法	分娩を促進するケアの方法 (6) 基本的ニーズを満たすケア (5)
妊娠期から産褥期まで一連の経過を捉える	妊娠期の過ごし方がよいお産につながる (4) 産褥期でよりよい母子関係をはぐくむ (3)
助産師のケアから学ぶ	助産師のケアから学ぶ (5)
自分の看護を客観的にみつめる	自分の力量に合わせたケア (2) 自分の看護の足りない点がわかる (2)

ように助産師としてどう関わるかを学んでいた。「産婦に寄り添う」では、産婦の不安や辛さに寄り添える姿勢が必要であることを学んでいた。辛い時に一人で耐えることがどんなに怖く、不安なことであり、そこに助産師がいて産婦に寄り添うことが産婦を安心させることになるという学びがあった。「産婦が主体のお産」には産婦の産む力を引き出し、主体的なお産になるように援助すること、分娩期を産婦が主体的に過ごせるケアの難しさの学びが含まれていた。

2) 【分娩経過のアセスメント能力の修得】

分娩経過の診断には、「分娩経過の予測の意味」「様々な情報やリスク因子の総合的なアセスメント」「即座に判断すること」「異常時の対応」の4つのサブカテゴリーに分類された。

「分娩経過の予測の意味」では、分娩経過の予測をしながら行動することの必要性和難しさや、お産に向けてもっとも良いケアができるように自分が動くことができるための予測をすることの必要性、今後どんなことが予測されるのか考えながらケアをすることを学んでいた。「様々な情報やリスク因子の総合的なアセスメント」では、はじめは内診所見からフリードマンに照合することばかりで分娩経過を判断していたが、産婦の様子や陣痛の周期や強さなど他の情報も含めてアセスメントすることができるようになったということや、産婦の主観的な訴えだけでは、分娩経過を判断できないので自分で分娩進行のサインを把握し、客観的に判断することが必要だと学んでいた。また分娩は様々な要素が絡み合って進行が遅くなったり、早くなったりするので、その都度産婦を観察して判断していかなければならないということや、日常生活行動も分娩進行に影響すること、経産婦では大きな陣痛や、導尿、歩くなど何かのきっかけで分娩進行が急に進むこと、どういう情報が重要で、正常から異常へ逸脱する危険性があるかを判断することを学んでいた。「即座に判断すること」では、受け持ててすぐの情報収集でアセスメントしていく能力が必要であり、身につけることができたことや、助産師はとっさの判断力が求められることを学んでいた。「異常時の対応」では、異常時の対応について、体位変換や呼吸法、酸素投与などその場での処置、緊急帝王切開の準備、産婦に不安を抱かせないような配慮について学んでいた。また異常時の対

応はまだ自分ではできないことが多いが、冷静に判断し、行動することの必要性を学んでいた。

3) 【分娩介助技術の修得】

分娩介助技術の修得については、「技術の体得」「技術の意味」「介助技術の多様な方法」の3つのサブカテゴリーに分類できた。

「技術の体得」では、実際に児に触れて介助していくなかで、右手と左手の力の入れ具合がどういう程度で必要になってくるのかを体で感じる事ができたことや、会陰保護の時、どれくらいの力で、というポイントが実感できたということが挙げられた。「技術の意味」では、技術の意味づけをしっかりと指導されたことが理解できたことを学んでいた。「介助技術の多様な方法」では、産婦の体型と赤ちゃんの大きさのバランスを意識した呼吸法の誘導や、努責の誘導の方法や体位など、側臥位になったり、足を抱えていきんだりと産婦に様々な方法を提案し、効果的に努責をかけられるようにすることを学んでいた。

4) 【分娩第1期のケアの方法】

分娩第1期のケアの方法についての学びには、「分娩を促進するケアの方法」と「基本的ニードを満たすケア」があった。

「分娩を促進するケアの方法」では、アロマセラピーやフットバス、乳頭刺激など促進方法について学ぶことができ、産婦に合わせた促進方法の選び方も学んでいた。また産痛緩和やリラックスの方法など一緒に考えて行っていくことの大切さを学んでいた。「基本的ニードを満たすケア」では、分娩第1期では産痛緩和のケアだけでなく、休息、排泄、食事などの日常生活行動や基本的ニードに対してのケアを学んでいた。

5) 【妊娠期から産褥期まで一連の経過を捉える】

妊娠期から産褥期までを通した学びについては、「妊娠期の過ごし方がよいお産につながる」ことや、「産褥期でよりよい母子関係をはぐくむ」ことを学んでいた。

「妊娠期の過ごし方がよいお産につながる」ことでは、継続事例で妊娠期から受け持ち、妊娠期のケアの大切さを実感したことや、妊娠経過が分娩に大きく影響することを学んでいた。「産褥期でよりよい母子関係をはぐくむ」では、産褥期のケアの方法とともに、分娩の影響で育児に集中できない母親の辛さや、必死になって児のケ

アを学び、その子とのペースを作っていく母親の姿から産褥期の大切さを学んでいた。

6) 【助産師のケアから学ぶ】

この内容は、家族へのかかわりについて助産師の接し方から学んでいたり、緊急時の対応について、助産師の動き方から緊急時の判断やチームでの対応について必要なことを学んでいた。

7) 【自分の看護を客観的にみつめる】

これには、「自分の力量に合わせたケア」と「自分の看護の足りない点がわかる」の2つが含まれていた。

「自分の力量に合わせたケア」では、分娩室への移動の判断が自分の力量と合わせられず、危険な分娩になってしまったことから自分の力量を知り、必要なケアを展開していくことを学んでいた。また「自分の看護の足りない点がわかる」では、自分が落ち着いている時は、産婦にも落ち着いて話せていたことや、分娩後の外陰部の状態をみて、技術の未熟さを知ったことなどを学んでいた。

2. 助産実習終了後の自分の課題

「自分の課題」は、A4用紙半分のスペースに自由記載を求めた。その内容は以下の7つのカテゴリーに分類された。()内は記述数である。

1) 【分娩期のアセスメントと判断能力】

これについては、「その場の状況に応じた判断とケア (10)」「自分の五感をつかって情報収集する能力 (8)」「分娩進行を予測する能力 (7)」「予測の修正とそれに応じたケア (4)」「優先度を考えて行動する能力 (4)」の5つのサブカテゴリーに分けられた。

2) 【分娩介助技術の向上】

分娩介助技術の向上については、「会陰保護技術 (10)」「努責の誘導 (7)」「内診技術の正確さ (4)」「臍帯巻落の解除 (1)」「胎盤娩出 (1)」の5つのサブカテゴリーに分けられた。

3) 【産婦へのケア】

分娩期を通して産婦へのケアの課題については、「第1期のケア (4)」「満足につながるお産 (4)」「分娩が長引く産婦のケア (3)」「バースプランを取り入れたケア (2)」「産婦主体のケア (2)」「産婦に寄り添うケア (2)」「分娩進行状態の説明 (1)」「正常から逸脱した産婦への言葉かけ (1)」「分娩室での言葉かけ (1)」の9のサブカ

テゴリーに分類された。

4) 【助産師としての態度】

これには、「落ち着いて広い視野で経過をみること (4)」「産婦を尊重した態度 (3)」「コミュニケーション能力 (2)」が含まれていた。

5) 【異常時の対応】

これには、「異常時の判断・処置 (5)」「児心音低下、弛緩出血への対応 (2)」「異常にしないケア (3)」の3つのサブカテゴリーが含まれていた。

6) 【チームでの連携】

これには、「周りのスタッフとの連携 (3)」「医師やNICUスタッフとの連携 (3)」が含まれていた。

7) 【妊娠期から産褥期までの看護】

妊娠期から産褥期までを通した看護では、「産褥期の育児や授乳の看護 (6)」「妊娠期の生活指導と看護 (4)」「分娩の振り返り (2)」「新生児の異常の判断能力とケア (2)」の4つのカテゴリーが含まれていた。

IV. 考察

1. 助産実習での学生の学びと課題

本学の助産実習での学生の学びと課題については、内容を分類するとほぼ同じカテゴリーが取り出された。このことは、助産実習において、多くの学びを深め、かつケアや技術の奥深さを知り、まだ十分修得できていないと認識している学生の状態を表しているといえる。

しかし学びのなかでは、【産婦を尊重しその人にとってのよいお産への援助】ということでは、産婦の主体性や個別性、気持ちを支え寄り添うこと、さらに持てる力を引き出すことの重要性を学んでいた。このことは、ケアの本質に関わるもので、本学の教育目標でもあるヒューマンケアの基本と技術を身につけることであり、生活者としての人間に対する深い理解と、本来対象がもっている生命力や生活力を引き出すことに繋がっている。

分娩は元来、生理学的な過程をとり、健康な女性の心身の変化を意味するものだが、ここ3～40年はほとんど医療施設での分娩であり、医療介入も多くの出産にみられ、医療介入の全くない自然出産は、ほとんど開業の助産院でしか扱われなくなっている現状がある。また合併症をもつ妊婦やハイリスク妊娠も増えている。し

かし、分娩の場所が医療施設であっても、もっともよい健康状態で産婦主体の分娩への援助を行うことは、助産師本来の責務である。

学生は実習を通して、助産師が分娩を援助することの意味を学んでいたといえる。また家族を分娩に巻き込むケアの実際も学んでおり、産婦主体であり、かつ看護の対象として家族も配慮したケアの重要性を認識している。

また分娩経過の判断能力については、予測することの意味や様々な情報を総合的にアセスメントすることなどは、最初の3例程度まではかなり困難であり、分娩経過についていくことで精一杯な学生がほとんどである⁶⁾。しかし、事例を重ねるにつれ、修得していったことがわかる。

分娩介助技術については、それまで学内や病棟でモデルを使って繰り返し練習してきているのだが、分娩介助を実際に体験することで、一連の流れとして行ってきたそれぞれの技術の意味を理解し、さらに会陰保護など児の娩出に関わる難しい技術でも実際の手の感覚として、体得していることがわかった。

分娩第1期のケアでは、産婦のニーズをとらえ自分でケアを工夫し、その意味を学んでおり、助産師のケアから様々なケアの方法について指導を受け実践していくことで、助産ケアの展開を学んでいた。

今回の学びの分析は、分娩介助を中心とした助産実習であるが、本学では妊娠中期から妊婦を受け持ち継続看護の実習も行っている。継続受け持ちの対象の産婦からは、妊娠から産褥までの過程を学ぶことができるが、分娩だけに関わった事例においても学生は、妊娠期からの生活や分娩準備が影響することや、分娩が産褥期にも影響し、産褥期のケアの重要性を認識している。

学生の課題のほとんどは、学びの内容でもあるが、特に分娩経過のアセスメントや分娩介助技術の修得に関しては、さらに細かな内容で到達できなかった技術をもっと深め、確かな判断能力を身につけたいとしていた。たとえば、分娩予測の意味がわかりできるようになることだけではなく、予測を修正し、それに応じたケアをすることや、自分の行動の優先順位を考えてケアを行うことなどを課題としていた。分娩介助技術については、内診を正確に行うことや、会陰保護の実際について、学生が自立して安全に分娩介助を行うことができるために必要

な課題があげられていた。

また異常時の対応については、基本的に正常分娩への援助が主体の助産実習では、十分学べないことは当然であり、また経験にも学生差があるので、実践から学んだ内容として取り上げるには、不十分である。しかし、多くの学生は助産師としては必要不可欠な能力であることを認識し、今後身につけるべき能力としていた。

医療チーム内での連携や協働については課題であげられていた。これは学びの中では取り上げられておらず、助産師をモデルとした学びはあっても、看護チームとして、自らどう動くかという点に関しては、卒業後の課題として残っている。

2. 卒業時の到達目標と助産実習での学び

本学は、4年制大学のカリキュラムのなかで助産師免許取得に必要な教育内容を、統合カリキュラムとして展開している。本学の助産師教育の特徴として、従来の助産師教育にみられる、詰め込みの過密カリキュラムから、もっとも学生にとって負担の少ない自主性を重視した、新しい助産師教育の構築を目指しており、特に助産実習を卒業研究として、4年間の学修の集大成として位置づけている。

卒業研究のなかで、学生は、看護過程の展開の実習として、助産実習を1年間かけて行い、助産師の基礎的実践能力の育成のみならず、自らの看護実践を客観的に捉えそれを基盤に、看護実践の創造的な開発を追及する研究活動により、自己の成長の方向と課題を明らかにしている。

学生の学びの内容を、看護学教育の在り方に関する検討会がまとめた、「看護実践能力育成の充実に向けた大学卒業時の到達目標」⁷⁾に照らしてみると、助産実習により学生は、「ヒューマンケアの基本的な実践能力」「看護の計画的な展開能力」「特定の健康問題を持つ人への実践能力」に関する実践能力は身につけているといえる。

ヒューマンケアの基本的な能力では、人の尊厳や人権の擁護、利用者の意思決定や、利用者の思い・考えの把握と適切な人間関係の形成が示されているが、今回の学びの内容にも、産婦を尊重し、その人にとって「よいお産」を援助することを学んでおり、その内容には、ヒューマンケアの基本的能力が示されている。

また分娩経過のアセスメント能力や介助技術の修得、分娩期のケアの様々な方法の修得などは、分娩期の看護過程を展開することにより、身につけているといえる。学生は事例を重ねることで、助産に必要な看護過程の展開能力を自立して行えるようになっている。

特定の健康問題をもつ人への実践能力については、助産実習では、次世代育成に関わる援助を学んでいる。卒業研究の助産実習では、分娩介助実習だけではなく、継続受け持ち実習、助産管理実習を行い、妊娠期から育児期まで、施設内の看護から地域の看護までと助産における援助を幅広く捉え学ばせている。これも卒業研究として1年かけて助産実習が展開できる強みであると考えている。

「大学卒業時の到達目標」ではさらに「ケア環境とチーム体制整備能力」と「実践の中で研鑽する基本能力」が挙げられている。「ケア環境とチーム体制整備能力」では、地域ケアについては、助産管理実習での助産院の見学や、継続受け持ちでの家庭訪問実習から学んでいると考えられるが、分娩介助を中心とした実習では、学びとして挙げられている内容は少なく、課題のなかで取り上げられていた。学生は、チームで関わることの意味や実際、他職種との連携について、卒業後の実践上の課題をして認識している。

「実践の中で研鑽する基本能力」については、本学では卒業研究として、助産実習の看護実践を素材に、自らの看護を客観的に振り返り、実践上の課題や疑問について研究的に解明するという学習をしている。学生は、分娩介助の助産実習を9月末で終了し、その後助産管理実習を行いながら、卒業研究として報告書をまとめるのであるが、その過程には自らの看護実践を客観的事実として把握する作業が欠かせない。また関連する文献を集め、情報を分析することで、研究に関する基本的な能力を養っている。この点は、今回の分析には含まれなかったが、助産実習を卒業研究として位置づけている本学のカリキュラムの特徴といえる。これらの点を踏まえ、本学の4年次の助産実習を含む卒業研究において、大学卒業時の到達目標は達成されると考えている。

まとめ

平成16～18年度までの本学の助産実習における学生の学びと課題を検討した。その結果、学生の学びは、【産婦を尊重しその人にとってのよいお産への援助】【分娩経過のアセスメント能力の修得】【分娩介助技術の修得】【分娩第1期のケアの方法】【妊娠期から産褥期まで一連の経過を捉える】【助産師のケアから学ぶ】【自分の看護を客観的にみつめる】であった。また課題としては、アセスメント能力をさらに的確にできるように高めることや、不十分な技術への課題、実習では十分経験できなかった【異常時の対応】や【チームでの連携】が挙げられていた。卒業研究として助産実習を展開していく過程で、学生は学生は大学卒業時の到達目標を修得していたが、今後は助産における看護実践能力の質的な評価について検討していく必要がある。

文献

- 1) 平澤美恵子：学士課程における助産学教育の実態について，全国助産師教育協議会教育制度委員会・小委員会報告，看護教育，33(5)；336-341，1992.
- 2) 我部山キヨ子：助産学教育における技術教育の現状と将来的展望，助産雑誌，58(3)；15-20，2004.
- 3) 草間朋子，栗屋典子，宮崎文子：助産師教育の大学院化を期待する，助産雑誌，57(1)；15-20，2003.
- 4) 服部律子，谷口通英，堀内寛子，他：本学における助産教育の展開と課題（第1報）－助産教育の現状からの検討－，岐阜県立看護大学紀要，5(1)；79-84，2005.
- 5) 堀内寛子，服部律子，谷口通英，他：本学における助産教育の展開と課題（第2報）－分娩期実習の実際－，岐阜県立看護大学紀要，5(1)；85-91，2005.
- 6) 前掲5)
- 7) 看護学教育の在り方に関する検討会：看護実践能力の充実に向けた大学卒業時の到達目標，日本看護系大学協議会看護実践能力検討委員会，2004.

(受稿日 平成18年12月6日)

(採用日 平成19年1月18日)